内村鑑三先生書簡

二

自 一九〇四 明治三十七年

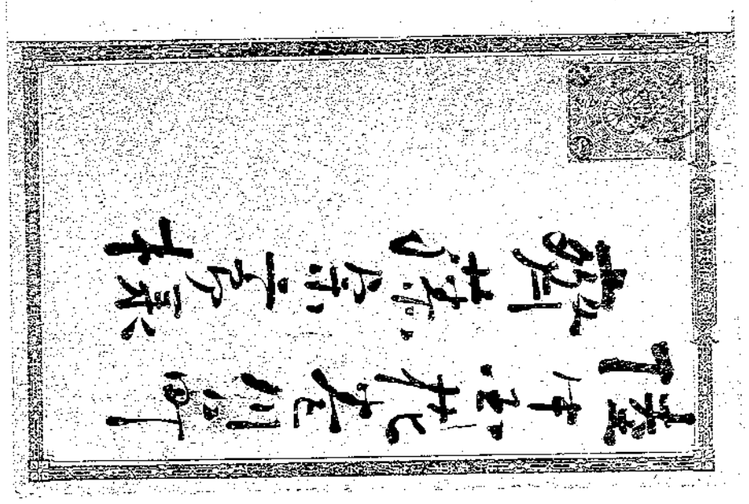
至 一九〇五 明治三十八年

謹賀新年

明治三十七年一月一日

内村鑑三

(社会研究所)



御書封入の為替を正に
落受仕りか
小生は斯く貴兄に申上たく、
貴兄目下の最大義務
は貴兄の肉躰を健全な
らしむるにあり、此事を忘るな
貴兄に取り大なる罪悪なり
、神は今は貴兄より使

道を求め給はず、健全なる
肉躰を求め給ふ、豈又此
此書と解すべきや、豈
貴下に勸めたきもの一つあり、
米国製化合酸素（ハルウンドオキシジエン）
書、價少き高し、一箱入
二ヶ月分用四拾余円なり、
脳病に用いて偉功を奏せ
し者日本にも数十人あり、
余の友人某之を受用し、
貴又、若しこれを要せば小生
委細を向合すべし、数匿
者にかくりたりと思ふて試みら
れては如何、只一つ小生の保證
すべきは、之に些少の害あも
ふと是なり、酸素を吸入
するなり、他の流長某を用ひ

いつもありがとう存ます

左申上ル、匂々

一月廿九日夜

鑑三

齋藤兄

一月廿九日

内村鑑三

東京四谷内藤町
聖書研究社
聖書研究社

陸中、花巻川口町

齋藤宗二郎様

貴閲

二月四日

内村鑑三生

東京角筈角筈
研究社書籍
地番電○

陸中、花巻川口町

齋藤宗次郎様

郵便
切手

拝啓、數回の清書面正に落手致しが、今日其品の事に付き知人を訪問致し候處、盡力方に面會を得ず、出し方に関する二冊を得て先刻届出方に相成候間、郵便致置候、其中に代價其他書綱記載有之候、成は一割位は割引出来申べき哉未だ當方にては未詳に候

敬白

陸中花巻川口町

齋藤宗右衛門

内村鑑三

聖書研究社
聖書部

拝啓、其後御様子如何いかや
先日「化合酸素」効能書差上置い
ざ御受取りに相成りいや何申上ず就ては
今日其受次人本腸ソノ子女史に面
会致しい處、同女史に於ても深く患苦い
同情を表せられ、償より二円五十銭
差引くべしとの事に有之い依て差し御入

用とあらば金三十六円、同文史、或は
小生へ為替送りに相成り申し候間、貴
方持ち差出すべき由申聞り候
大沢通知申上げ
義弟始方、悲歎の極に付、此許引籠り
沢崎奥へ参るべく候、日々

二月九日

斎藤宣三郎様　内村鑑三

二月九日

内村鑑三

陸中、花巻川口町

斎藤宣三郎様

拝啓、其後御様子如
何いかや伺申上ル、

二月廿九日

陸中、花巻川口
齋藤宇三郎
内村鑑三

其後近々清快後の由大
慶に存ず、当方異事なく、
善い事と悪い事との混合にか、
陳は別紙の通りの清地より
舞込ぶ、清一覧（ご）なられ、小生
より（こちら）は彼に断状（ことわり）と共に小生の事に
就ては責任に就て同紙すやう

申迄ありし、若し彼とキリストに
匿まると得ば幸甚なり、
今日は今より福島縣伊達
郡霊山村まで傳道に参りし、
春曙に相成り、殺すためよりで
活かすための出陣最も英くか、清
地清見に立ち、直ぐ独り日々
四月廿三日午前

内村鑑三

高橋家三印

謹啓
突然先生に紙面を差上げ、実に私儀子先生の
御経歴並に三冊の御著書を見聞して知り得候処小生
の立場を御教示に依て定り遠方者共、先生の御経歴及び御著
書を見聞して幾分か感化の受け事に謹て感謝致し候
小生は其他教徒にても其實験を聞き、また賀誠を利斷して正し
き足しるべ眞正なる伴侶の声と信じ輝間なる者共
先生に御親有る交外の事に無く度い小生三年前
迄も青年会に飽迄も親しみ申候
なる大家の傳記を見ても皆一度は(八)志デタリ者多ク小生も御

こテ親ハ（しんぱい）ヲ中止致シ自活ヲ致シ度ク志願ニ昨年
東京ニ出テシ事モ有ルモノ家ヲおル時ハ遂ゲ又前後ノ学モ無ク
又家中ニ多忙故ニ小生ノタメニ強ド仕事ヲナサス有様故友人並ニ
親ヒノ批評ヲ別サシ遂ニ今ヤカ活ニ遂ヲ本メントスル時ニ遂ニ
帰ヲ来
帰村後殊ニ金ナキ事ハ年方無ク既ニ一年餘モ暮シ来レドモ
ホダ其念ハ誰ニ事無ク今ハ最モ頑ド上京決心致シ居ル来ル
ハニ今迄モ親モ許サズ又来年ハ世ハ微兵齢ニモ来ルハ後ニ年
ハ家中ニテ手傳ヒ勉学致シ来年ハ五六月頃ハ上京致シ事ト決
心致シ来候ニテ之ヲ「リンコトン」ハ此ク熱心モ無ク来ル此何カシテ

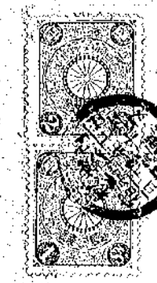
今ヲ定ヲ置キ其時ニ餘ク遂又掃ヲ致シ置キ度キ者ト思ク
友人モ無ク誰モ親切ニ尋ネテクレル人モ無ク此ニ
先生ハ多ク小生ヲ待使ナサルトノ事ニ有ル如何ニテ矢ハ
ニ待頼申シ度ク願モノト思ニ候ハ今度迄差上来ル然ルニ小生
ハ学校モ高等小学ニ三年迄ヲ入ル又若ニ来ル致シテ無智学
者ナレバ学ヲ到リ事ヲ何ク何年出来ハサラ庭掃除デモ
サセル者ニ待度ト下サレ度モ今ノ事ニテハ無ク来年ニ来
レドモ一應待聞キ申シ私モ年心致シ度ク思来ル待用ナ
ハ来年ノ五六月頃ニ来ル致シ何ク何ク待遂事年度
頼上来

一筆小生ハ家ニテモ誘々ノ事ヲシ居ル者ナレバ学問上ノ事ハ
来ザレドモ働ク事ハ少シ位ハ慰ニ為ニテハ無ク実又コノ手紙
中ニモウソ不ニアラズコレハ全無学ナル故ト許恕ヲ下
サレ度実　敬具

明治年華月末日

内村先生様　　箱崎太郎

岩手縣稗貫郡花巻
字鍛冶町百一番地



四月廿三日

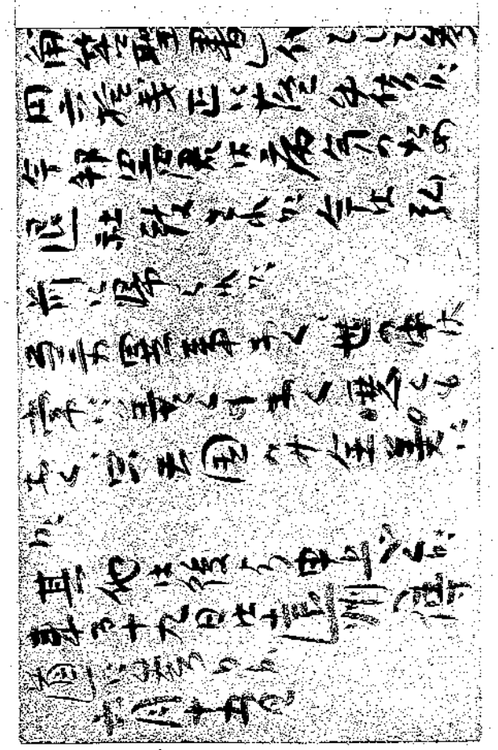
内村鑑三

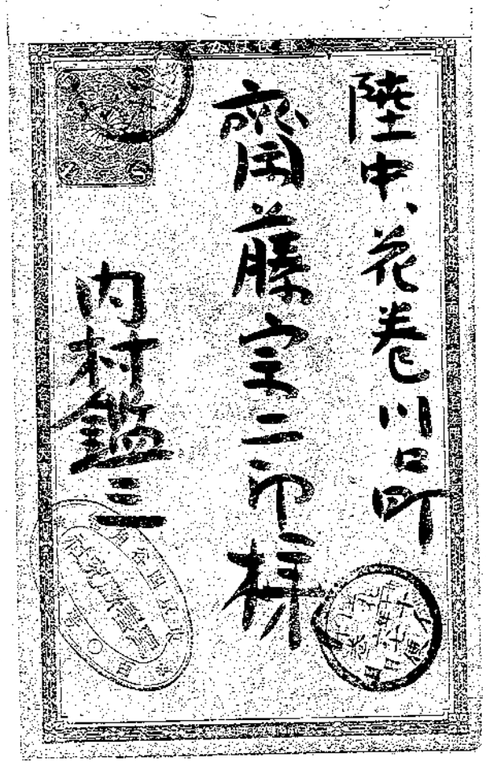
東京府麹町区
字角筈百一番地
聖書研究社

陸中、花巻川口町

齋藤宗次郎様

親展




陸中、花巻川口町
齋藤宣三郎様
内村鑑三

清書正に拝受、清健康来
だ全く清級後よきを悲ずり、祈
角清如美正証之、
清注文のパムフレットは有るも、
無きもあり、多きもあり、少きもあり、
依て郵金取雑せ百三十五部入べ
ワニ差上ぶ乃左様も承知ありたし
且つ何等恐入ル工夫、便利上

俵車便ヲ以テ差出ス引
換證持参、停車場ニテ
渡受取リ下タシ儀ニ取計
度又ハ清弱体ニ付生ス昌ハ心配
ス所ニ清書ス　匆々

七月四日　南条文

内村鑑三

七月四日

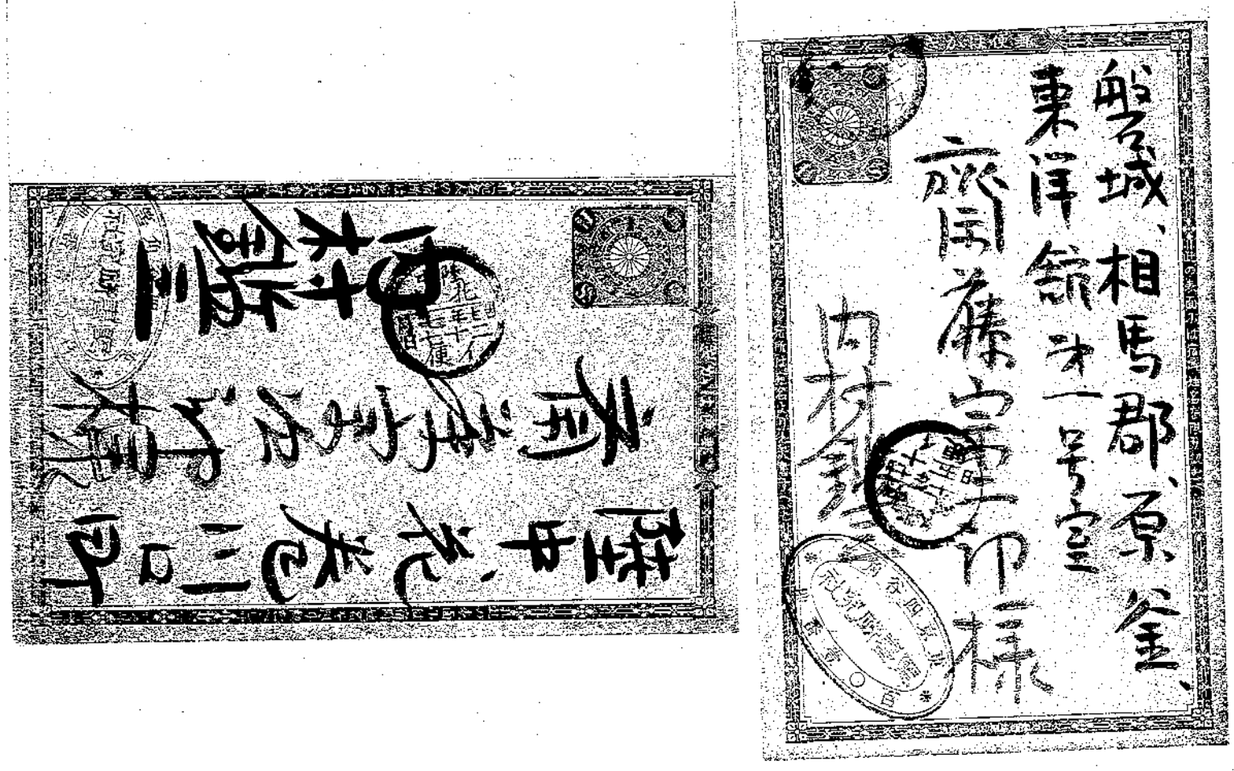
内村鑑三

陸中、花巻川口町

南条宗三様

拝啓、清地方の清者
ときは左つかにか
角田町百五十七
高山松之助
荒濱町荒濱一丁目
四九十三
武者渓雪
石川郡窪田村上窪田
武産正雄
左つ面ろ
七月十三日

拝啓、清無事清涼安を
賀す、扨角遠方清来訪の
所、甚た失礼致しかへ何ろ
も清身脉清大切にあさる
へくかの匂々
七月廿五日


磐城、相馬郡、原釜、
東洋館第一号室
齋藤宮印様
内村鑑三

拝啓、其後御健康如何にハ
や伺申上ル、当方無異御安心あそ
れたくハ、先日子子より伺ハ（又）ハ、つまうナキ
事申来りハ、彼女ハ一実らに異
純にして心豊育之いハつとゝ有り、小生
ハ女子ハ理屈ハらぬのを好サル、彼女
の御清廉何分頼上ル、盛岡ハる

工藤善太郎氏ゟ手紙有之ハ、
愛すべき彼は亦貴兄の援助を要
すると大きく信じ申ハ、小生ハ此ハ
又々活地に出て諸氏と見えなく存ず、
若し本服ソノ子ゟ何か申上ハ出
来る丈け彼女の言に従せ申ん事を
望ミ申ハ、恩寵豊かに貴家の上に
れアレメし
南無乞　九月廿九日　鑑三

九月廿九日

封

内村鑑三

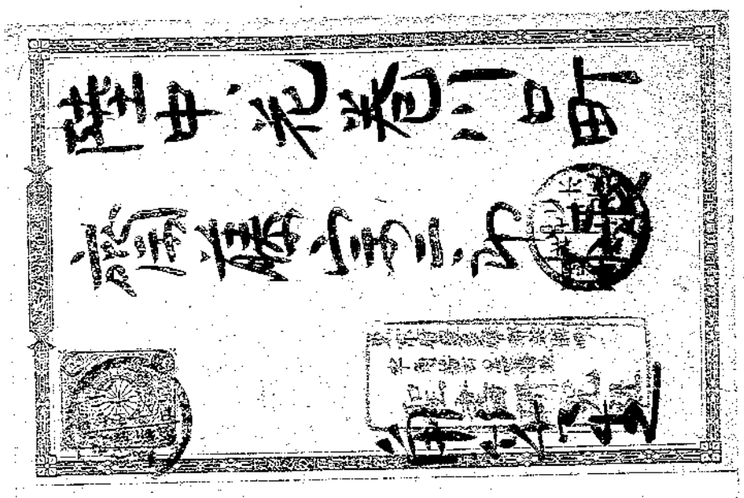
陸中、花巻川口町

南藤宗二郎様

手紙

東京府豊多摩郡渋谷町字角筈百八番地
聖書研究社

抑陪、法門に於ける法門向合せにより
多くの者は實の世に有之に眼病より
精神病に罹り、困入り、殊に俗
人共が此虚に乗じ金を左等取せ
人も行るを見て實に罪悪の世
の眞相を発見致し、諸君に於ても
小生等のために法門祈りとなたらん事を願ふ


東京帝國大學
第三學年 心理學 講義筆記
學生 三條孝太郎

去落陳るの敗毋死去る
際しても厚迷は深切なる
佳句年賀状の興味は厚情
の敢て無益有難く候
花々謹んで清好謹を謝し

倍芳将来の活就文を
祈上候早々

十月廿日　内村鑑三

花巻独立教會
諸兄御中

陸中、花巻川口町
齋藤宗二郎様

内村鑑三

拝啓、想へは昨年の今日は新巻に
於てありき、如何に楽き日なりしよ、
諸君の中、未だ一人も主を亡ぜ
ざりしを喜きと知て深く感謝す、
願はくは恩澤あれ　下
地に平安、人には恩澤あれ　下
ルカ　新陸は世界の教育
三十七年十二月廿日夜

陸中、花巻川口町

齋藤宗三郎様

陸花巻

東京府豊多摩郡渋谷村

宇角菩百〇〇番地

内藤三郎

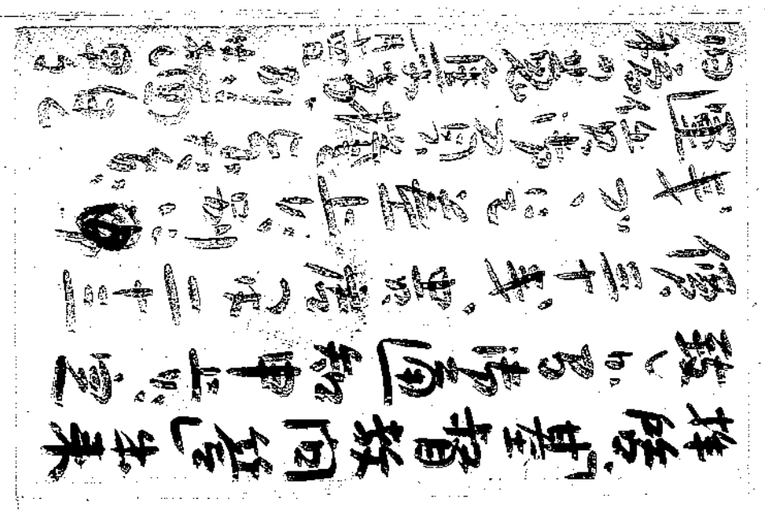
謹賀新年

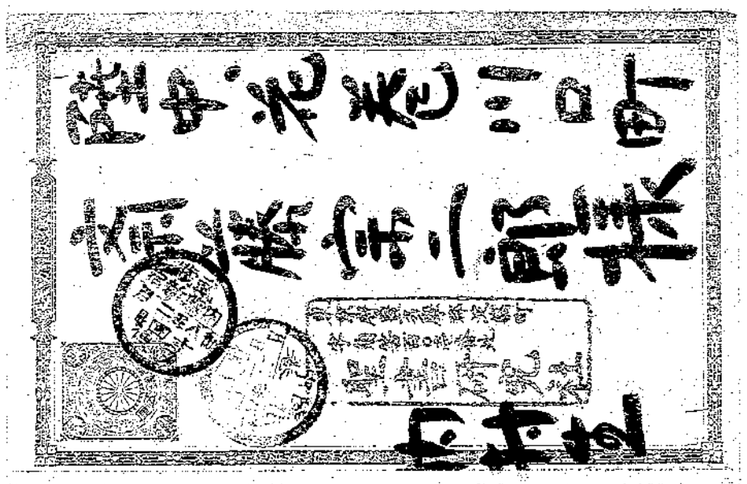
明治三十八年元旦

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇三番地

拝啓、基督教向学者未
だ少しかゝる講演知申上ぬ空
前三十銭、貴店にて二十三
銭づゝにて差上ぐ、別に郵
便為替にて拾円
四拾銭の為替
別に郵便にて
送る




東洋文庫
東洋學小叢書
一四二 ニホンゴ・ホウ言

拝啓、陳は穆と申上はべり甚恐
敷向笠一義今般出版相成
りはべりそは十部大小包便を
以て差上はべり何共清年数に
はべれども先般母逝去の際
清寧附与はべりし外姉妹方へ

一部つゝ市販節与なく俗に
報上以、尚は差し不足有之候
一寸と市通知与たくい早き

二月十六日　内村鑑三

斎藤宗二郎兄

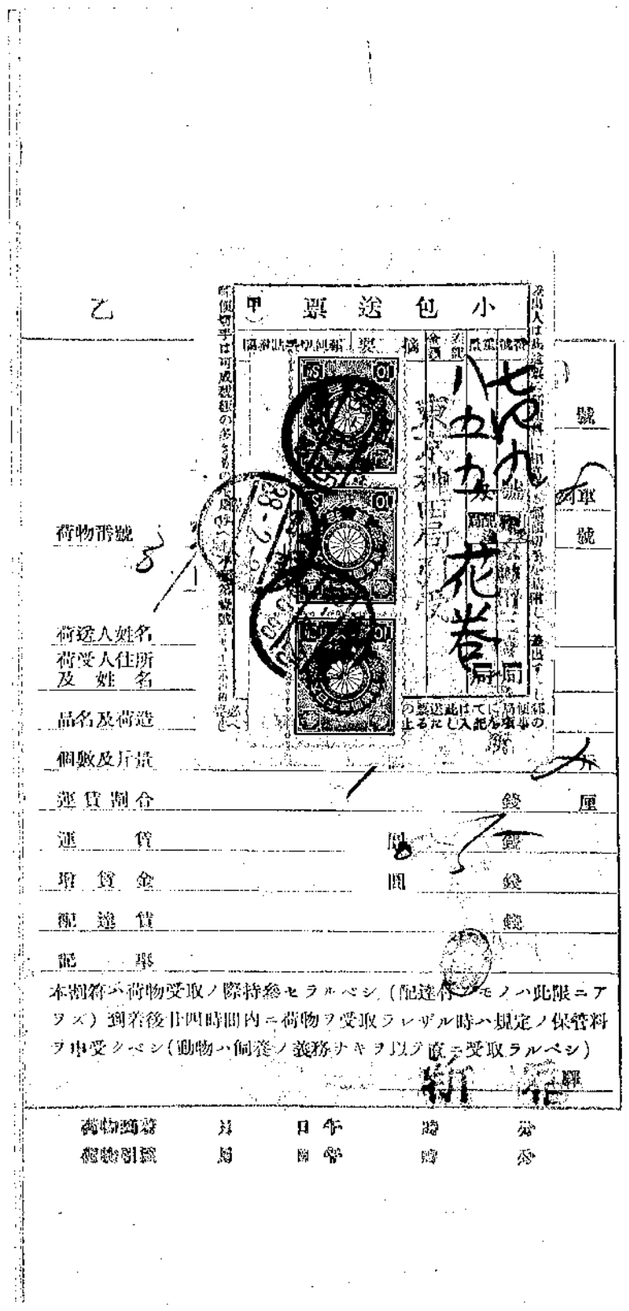
二月十七日　内村鑑三

陸中、花巻、川口町

斎藤宗二郎様

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百8番地 聖書研究社

拝啓、雑誌六十一号十三
ア鉄道便を以て差出ス
可申筈ニ付たくハ封紙
を附シ小生宛堂より出
配達致上ハ早く



乙　小包送票　甲

荷物番號

荷送人姓名

荷受人住所及姓名

品名及荷造

個數及斤量

運賃割合　錢　厘

運賃　圓　錢

增賃金　圓　錢

配達賃　錢

記事

本割符ハ荷物受取ノ際持參セラルベシ（配達ノモノハ此限ニアラズ）到着後廿四時間内ニ荷物ヲ受取ラレザル時ハ規定ノ保管料ヲ申受クベシ（動物ハ飼養ノ義務ナキヲ以テ直ニ受取ラルベシ）

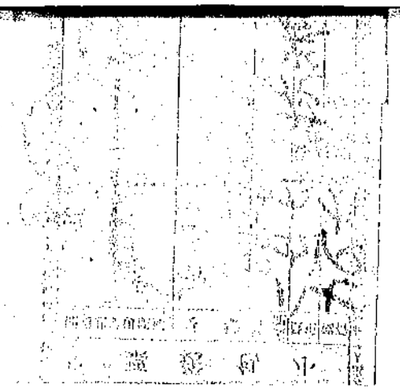
荷物到着　月　日　午　時　分

荷物引渡　月　日　午　時　分

二月廿二日

武藤堂書店

東京府豊多摩郡渋谷町字角筈百〇壱番地
聖書研究社



乙

日本鐵道株式會社　29

運賃賦番號　　號

小荷物割符

明治　年　月　日　時　分到着

荷物番號　　號　引換證番號　　號

自　新　橋　驛

荷送人姓名

荷受人住所及姓名

品名及荷造

個數及斤量　　個

運賃割金　　錢　厘

運賃　　錢

增賃金　　錢

配達賃　　錢

雜費

本割符ハ荷物受取ノ際持參セラルベシ（配達ノモノハ此限ニアラズ）到着後廿四時間内ニ荷物ノ受取ラレザル時ハ規定ノ保管料ヲ申受クベシ（動物ハ飼養ノ義務ナキヲ以テ直ニ受取ラルベシ）

新　橋　驛

荷物到着　月　日　午　時　分

荷物引渡　月　日　午　時　分

二月廿二日

武康堂 沛中

東京府豐多摩郡渋谷町字角筈百〇壹番地
聖書研究社

陸中、花巻川口町

求原堂沽中

二月廿二日

東京府豐多摩郡淀橋町字角筈百三番地
聖書研究社

拝啓、寒中弗病気如何ハい
や伺申上り、弗手紙おき故
当方心配致し居り早々

三月二日

陸中、花巻町

齋藤宗二郎様

内村鑑三

三月廿二日

水庫堂様

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇壱番地
聖書研究社

三月廿三日

陸中、花巻川口町

水庫堂様

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇壱番地
聖書研究社

拝啓、別紙清長丈兵衛
に付、
て種清令格之と共君の内妹
のために大賀幸に差し清
出陣に相成り申候、雷鳴助元
分に清懲らしめをるべくか

叮々

小生来月は休養、五年
振りにて始めて一ヶ月の休暇を得
ば「新希望」の清歌歌作を
早々

四月廿三日

南溟の兄

鉞三

四月廿三日

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈四〇三番地
聖書研究社

陸中、花巻川口町

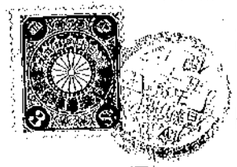
齋藤宗三郎様

親展

拝啓、木服婦人と共に清届けの金参
円正に落掌仕りし、
貴兄肉體の益々清壮健にあらせられと
聞き非常に喜ばしく存ず、
小生先日越後に入り、彼地に於ける同志
のみなもと強力なるには驚入り、無教会信
者は今や日本国に於て一大勢力となる
つゝ有之り、實に感謝に堪えず申し、

沛高次姉何に出や、沛庵の吊状を
也報上、
今般佐藤武雄君事務員として
入院致し、為の業事調い最好都
合に沛高次、沛地諸兄姉へ宜しく沛
通告報上旦々
五月廿五日　内村鑑三
南条兄

盟国在監人たちの手紙
運ぶにて次たちの雑伝に掲げ
申すべく、



内村鑑三書簡研究社

五月廿五日

封

内村鑑三

陸中花巻川口町

南藤宗二郎様

貴酬

拝啓、清書正に拝読、清身體の清健康と清庭の清繁昌を祝し
り、毎月の清書上高と受玉はり、
駭入り急激の進歩は望み申さず
りつつ共、固くとも揺かざる（コリント前十五〇五八）
庭とまられんことを望みり、
小生も今日の基督教男子たるものに失厥あ

男子中川五共、各地方に確固たる兄弟
あるを知て非常に感ぶみ申り、二年間に一
度位は清地に参るやう常に心掛け
置なく候、我儕永久に此世に在るにあらず、
故に此世に在る間は成るべく親しく快に
暮らしたく存ず、清兄姉へ宜しく御傳声
頓首 六月九日

角筆生

南藤兄

封書

六月九日

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇壱番地
新希望社

陸中、花巻川口町

南藤宗三郎様

拝啓、久振りにて貴信に接し安心仕候、
今は君より久しく手紙を来らざる故
イツデも心配致しが、
君、落足来、其いつ子の安生を聞て
喜びが、花巻に居やに今の新婚の目的
点あり、信者は多し、生れども友人は甚だ少し、
而して今は花巻に於て多くの友人を

有すると確信す。
余は過ぐる二ヶ月教育信者の頑株
と聖書改譯事業に従事して、
大不快と感じたり、其昨日断然断
ち申し、教育信者の為す所に我
慢無教会信者の解す能はざる所
多し、是れが彼等と共同事業の
最終なるべし。

君は注意すべきことなり、誘惑に陥く
木服嬢を信する勿れ、(少き寡婦
は之を退くべし)テモテ前書五章
十一節―特に十三節を見られよ 彼
女は男人にあらずと信ず、然れども口実
つくり事実なり、我等は斯かる人
に注意し交際すべきなり、日三九仕

勿論秘密ニ
僅ニ清牛製のジャムを拝受致
し、先般清喜堂一のもの近頃に無
用も一同賞味致し居り候
清兄姉へ宜しく早く

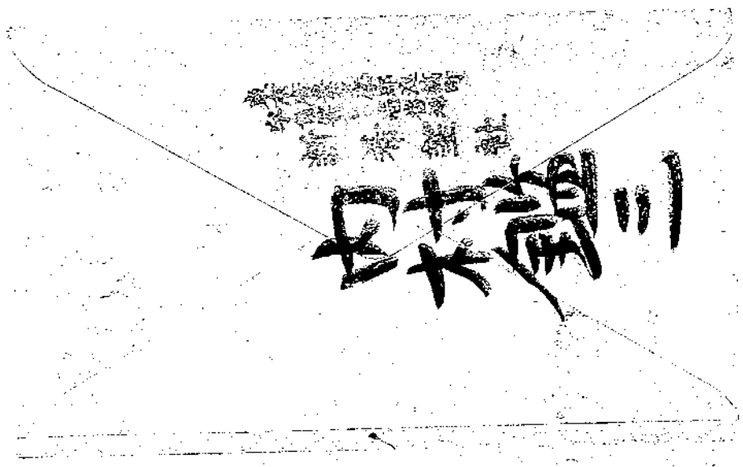
七月八日　鑑三

斎藤兄

陸中花巻川町
斎藤宇三郎様

貴酬

陸花巻 北十七 七月八日



特僧、陳は昨年貴兄清出の節清地
産百金の根澤山に清持越候屋、
其中如何のはづみにや一二箇食事に
上らずして掃溜に下り出屋、今春出入の
植木屋之を発見し、もったいないとて関所
の花壇に植え置かるる境に到り美
事に咲出し、家人一同喜び居りし、小生も

かの絲陰に独り逍遥するおりには常に
目に附き侍ぬつかしく存ず、今日計らずも
家人と佐藤とは鎌倉に参りと留守、小
生老人と共に留守を致し、草稿の冥は
終へし頃、櫻林樹下に涼を取るに方て、又す
かの百合花目に附き思はず左の一句を
口吟致しに早速侍知らせ申上ず、

咲きにけり奥州の巻百合の花

くきに思寄の宴をは結びて
百合花開花の状を侍一見の上侍一笑
ヒたく頼ず、
当方一同無異、侍家族共に
侍地滞居侍一同へ宜しく侍傳へ
ヒたく、日下を

七月廿八日午刻三時

齋藤兄

内村鑑三

七月廿八日

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈六百番地
新希望社

陸中、花巻川口町

齋藤宗二郎様

親展

花信

5、
三十八年
七月廿八日

葛巻氏の幸を祈りつゝ
小生ら慰問状差出置き、

拝啓、市君書翰並に
市写眞を御送り、
戦争の結果当地
紛擾を極めつゝあり、

極力一同無事にて、
百事安心なるなり、
非義盜は結局勝
を制し、保し国家の
危険に赴きし痛
歎の至りなり。
木脇婦人より金参
円〇五銭正に落掌
致しり、
今後は清年数多く
無小生まで清逆届け
頒上に彼女は模範

的数会婦人にして、
ツウナキ世間ノ評判
を小生等に伝へ、小生等
は之を聞くに堪えざれば、
小生等は彼女と見合
とを欲せず、斯く云いて
小生等は彼女を以て悪
婦人なりと申すには無
之候。左様御承知願
上候。
雑誌昨日差出置候
写真美事に取れ申候。
皆様一度ご覧遊ばされ

九月十百
鑑三
齊藤

九月十百
内村鑑三
東京市麻布区霞町
安藤智吉郎君宛
新著紹介

陸中、花巻川口町
齊藤宗二郎様

貴酬

特陸、陳状申ハ
別紙の如之者沙汰後之
ハ相成りハ上ハ如何ハ者、
越後相模同大度、
義ハ信州上田ハ之ハ既ハ
設之ハ相成りか、尚ハ

追々成立の見込に付
度々願出来の法者
会と申すべき者に有
之候、教会はあれども
無部にすぎず、従而
的父兄的團体に付
度、必ず法同意と存
候則は法隠意多少
法変更あるも不苦哉、
法地法居と雖も相
法の上、可否法通知致上
候、早々

九月六日

鑑三

南条氏

四井氏

禮白

會則を讀みて自らの信仰と
行方とを顧れば入會畧君
に對して躊躇せざる所たらざる能は
されど其主旨は啓全無用
言葉ものなれば予は懐んで
入會せざるを得ず、
幸て文面に表はせば前

記の会則（別紙の会則）は正当
のことと認められ之を整頓し
且つ各自に責任あらしめんと
せば自署捺印は又絶つべ
きことと思考す（印形を有ぬ者は拇印を捺すもよろし）
要は主イエスキリストを信ずるの
一点に存し之に加盟したればと
て何等『人』に負る所あら
ざるべし、

予は一言を附記して予の親愛
なる同志に表示するものなり

十一月一日　敬具

齋藤宇一郎殿

花巻教会役員当日出席せざる
四名其他に孔標
梅野勝治郎殿

[illegible]

教友會主旨

我等神と其道とし給へる獨子イエスキリストを信ずる者茲に相結んで教友會を組織す父なる神の援助を得て同志相扶け神の聖旨に合する生涯を送らんことを期す

會則

一本會は同志三名以上ある所には之を組織するを得べし。

一本會は友誼的團體なる所謂る教會にあらず故に確實なる基督教的信念を抱く者は何人も其會員たるを得べし。

一本會々員は少くとも一ケ年以上基督教的に方正

なる生涯を續げし者に限る

一 本會會員にして未だ獨立的生涯を送らざる者は本會會員の議事に參與することを得ず。

一 會員は少くとも毎月一回(若し出来得るならば毎日曜日)一所に相會し祈禱讃美感謝を共にし且つ同志の安否を問ひ哀樂を頒ち相互の援助を計らべし。

一 各會毎に幹事一名以上三名以下を選任し本會の事務を委ねべし。

一 本會會員たらんと欲する者は各會員三分の二以上の承諾を要す。

一 主東京の本會を以て中央部と定め各地に散在す

る本會會員の聯合一致を計らしむ。

會員の心得

一 強ひてはあらざれども禁酒禁煙を努むべし。

一 出来得る限り日曜日は之を信仰道德修養のために用ひべし。

一 毎週幾干かの金を同胞援助のために献ぐべし。

九月十六日夜

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇番地
新潮社

陸中、花巻川口町

斎藤宗三郎様

拝啓、今日は品々沢山送り下され、沢
好意幾重にも有難奉存ず、児
輩は大声歓呼を以て之を迎へ、
老人立重く君の沢好意を感じ申し、
小生義先月中旬来病気にて今日
全快仕らず、因入り申し、今月の雑誌

に情山ある者に法を説き、
教会所々に起り中に、東京に教
会館新築の議起り、已に少し進み
の賛成有之り、在京教会の庭場、
地方教会の旅館の用に供しなくば、
凡そ千五百円を要すべく、若し其
半額を神より賜はらば直に建築に

取掛り申すべくより、斯く申上げて法
地教会の主務的宣言附を使ふと欲
するに非ず、但し若し法勸法あらば
其神聖なる次見本家」の中に法加
入願上たくり、五年以内可なる、十五
年以内なる。

清地教支会々員名簿清細製
頒布、会則の後、各員自署にて姓
名を記し、之に印し、二通を作り、
一通は清地幹事の手許に差し、他は
本部清地宛送付されたく、少生病気全
快の上は尽力仕るべくに、左清礼まで申
十月一日
斎藤久　鑑三

十月一日　内村鑑三

陸中、花巻川口町
斎藤宣三郎様
貴酬
清礼

幹路、先般の清送品は最重
にて有難奉存候、佐藤君へも宜
しく御傳へ下たく候、制事美目下は
腫物治療のため温泉へ参り居り、
千葉縣の教支より女を送り出し、
れにて一同安しく暮らし居り候
十月九日

陸中、花巻川口町

斎藤宗二郎様

内村鑑三

其後諸君佛事をなすことなし、

陣は佛地選出前代

儀士佐岸昌蔵氏事

近頃キリスト信者にて

られ小生方へも二回佛

来訪あり、種々信仰談
有之、且つ清地に於ける
兄弟姉妹のことを聞
かん非常に喜ばれ以来
は手を携へて主のために
相働き(はたらき)申されが、今般
清私用にて清帰郷致さ
れが居き小生にも同道し
ては如何にとの清申出にかえ
共、小生目下の處外出は
困難なる旨申置候
清地に参らるる上は必ず
清君と清会合致した

き由申されし居りかに付き
諸君に於ては老と共
ぶの偉精神と以て充分
に偉教遇あらんことを
望サル且つ又氏は未だ
教会等のことに関しては至
て寡大なる考へと抱か
れかに付き、自然諸君が
長者として仰ぐべき好良
の兄弟とも成らるべく、同、
主に在て親しく偉交際
あらんことを切生よりもゆに
偉勸の申上げ、氏の令息
は札幌農学校に於て小

生同窓の友にも有之、
傍々氏が今般キリスト信
者となられしことは活地の
傳道上神の摂理かとも
存じられ、氏は近頃に新
希望」報徳の購読者
に渋幸が、
又岩手郡雫石村小出石
井農場技師(ロ)長崎
渉氏は数年に渉る研究
生に渋幸が好機会も有之
ればと渋往来する又は渋
文通をすゝめ人ごとと罪
へに渋勧の申上ゲ

右申上たく早々

十月三十日夜　　内村鑑三

青柳敬支

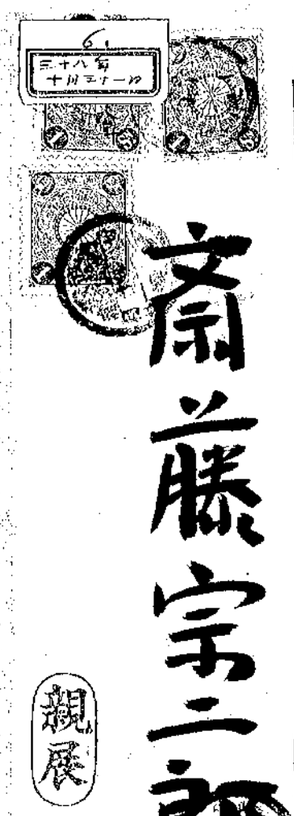
其他在花巻諸友

諸君

再伸、諸地教友宜成

三は如何の清都をにや

同申上ル



十月三十一日

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇番地
新希望社

陸中、花巻川口町

斎藤宇二郎様

親展

幹陰清地数度人員名簿
清送りヒて有難奉存候小生
の後想面り清地に強固ある国
（候はゞ寄と清面にて報上ゲ多少の清用情は表しなくなる）
鮮の作られし決感謝の至りに存ず。
海輯多忙中一寸と清匠辞申
上ゲ早々　十一月廿九日夜

陸中花巻川口町

齋藤家第三之棟

明治三十三年

拝啓、歳末益々近づき
候多忙のおとし寄、当方
至て静粛に御座候、但
東北地方の凶作痛く報
じ経済に其影響と

及ぼし困難と出来、
然しあかく是を以て我が同
志の如何に東北に多きを
知り、又彼等と苦痛を
共にすると知りて慰藉と感じ
慰藉と感じ中に、願くは
神、病める東北地方を
憐み我等に然眉を開
この機会を早く与えたまへと。
又今朝面倒を預上に明春
早々「よろづ小言」と題し、
十五の
第朝報に掲載せし
ものなり

文を集めて一冊とせんとの
から、何共恐入り次第、実
只のスクラップブック高は一度
特借願上り、小生の要する者
は非戦論に関する論文
に渉る。其他は先年拝
借の節表く写し取り申し、
差し支只に於て清所持
あるべし照井君に清同念せ
致上り、且スクラップブックは
小包便にて清屋附願上
切手十銭封入致し、
無しきクリスマス清君と共
にあらんことを祈り上り、「信仰

双六」必ず清試めし頂き、
呵々、日々

十二月廿三日　内村鑑三

斎藤兄

十二月二十二日　内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町角筈字西ノ原番地
新希望社

陸中、花巻川口町
斎藤宗二郎様

親展

拝啓 昨日一書差出置候處
其後無之敬支金に家ゝ
る市贈物に接し、市夏喜の千
萬有難奉存候、茲に不取敢
一同に代り市夏礼申上ぶ早々
十二月廿三日

陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様

内村藤吉